

No.3103

「インド・北東部における第二次世界大戦の記憶—継承と観光開発をめぐる近年の動向—」

一橋大学／デリー大学 博士課程  
渡部 春奈

本研究では、インド北東部ナガランド州を中心とした第二次世界大戦の戦争経験が観光開発に与える影響をあきらかにし、現代社会における戦争と記憶の意味を、社会学的視座から分析することである。

本研究が扱うのは、旧日本軍が第二次世界大戦中に実施したインパール作戦である。旧日本軍は 1944 年 3 月から 7 月にかけて、インド北東部にある現在のナガランド州とマニプル州において連合軍との戦闘を繰り返した。しかし連合軍の圧倒的な軍事力によって旧日本軍は大敗し、日本兵の退却路は白骨街道として知られている。

調査 1 年目の 2019 年は、第二次世界大戦終結から 75 周年を記念する年ということもあり、戦争を記念するさまざまな行事がナガランド州とマニプル州の両州にておこなわれた。現地調査であきらかになったのは、各行事には一般市民の参加は極めて少なく、行事の存在自体が十分に認知されていない現状であった。そうしたことを市民の「無関心さ」とする観光業者や観光客の声も聴かれたが、それは第二次世界大戦が現地住民であるナガにとって 記念する対象になりえなかったことに起因しており、「無関心」という言葉には回収されない、ナガ独自の方法で戦争が記憶されている。

2 年目の調査では、戦争の記憶と慰霊に焦点を置き、なかでも、墓石に刻まれた戦争の記録をとおして、ナガの慰霊の実態を検証した。ナガの元従軍兵らの多くは、彼らの兵士としての実績を墓石に刻む傾向がみられた。特に英軍との関りが深くあった村では、墓石をとおして後世に村の歴史を継承する試みが見られる。

さらに、日本におけるインパール作戦の慰霊を比較するため、戦後実施された遺骨収集事業を検討するとともに、日本において短期調査を実施した。インパール作戦に関わる慰霊碑や記念碑の訪問からあきらかになったのは、インパール作戦を含むビルマ方面に参加した旧日本兵の慰霊碑の多くに、ビルマの仏塔であるパゴダの形を模したものが多く採用されてきたことである。遺骨収集の記録集や、遺族が記した慰霊紀行などの手記にも、パゴダに関する記述が多くみられ、パゴダの記憶装置としての役割があきらかとなった。コロナウィルスの世界的感染拡大の影響を受け、インドの観光産業全般が休止状態となり、観光業に関わる考察は十分できなかつたものの、本研究をとおして、さまざまな主体の記憶と慰霊の方法をあきらかにすることができた。